

「生活と社会」

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

石川県金沢市平和町1丁目1番15号

電話番号：076 - 241 - 5041

E-mail：fuzokuhs@kfshs.kanazawa-u.ac.jp HP アドレス：http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/

学校や地域に関する情報

(1) 学校規模

生徒数 379 名、教職員数 24 名、

学級数 9 学級

(2) 学校の教育活動の特色

高校教育の理論的・実証的研究、教育実習などを行う学校である。生徒の学習意欲は高く、ほぼ全員が4年制大学進学を希望している。自主・自律・自由を伝統としており、開校記念祭では歌舞伎上演を恒例とするなど、生徒会行事が盛んである。

(3) 地域の特徴

生徒の半数強は附属中学出身、半数弱が石川県一般中学出身者で、県外中学出身者も若干数在籍する。所在する金沢市は伝統的城下町で、近辺に歴史遺産も多い。

I 総合的な学習の時間の全体計画

1. 目標

自己を取り巻く社会、および異文化・異社会を主体的に探究学習する中で、学び方を身に付けるとともに、問題解決に向けて創造的、協同的に取り組む態度を育て、表現力を養う。それらの学習を通して、自らの生き方在り方を考える。

本校の総合的な学習の時間は、「生活と社会」と「台湾現地学習」から構成されている。前者は「自己を取り巻く社会」を対象とし、後者は異文化・異社会を対象とする。これらの対象について生徒個々がそれぞれ課題を設定し探究的に学習する中で、学び方を身に付け、創造

的協同的に問題解決する態度を育て、生き方在り方を考えていく。

2. 育てようとする資質、能力、態度

- ①課題発見力
- ②情報収集・処理・分析力
- ③論理的構成力
- ④コミュニケーション力
- ⑤プレゼンテーション力
- ⑥異文化理解力
- ⑦自らを振り返り、自己の意見を形成し発信する力

3. 内容

「生活と社会」1年生2単位

- ・身近な課題を教師が提供し、生徒がブレインストーミングをして、ポスター発表。
- ・身近な課題を生徒が選択し、ディベート。
- ・未来を創造するテーマについて2チームがプランを提案し、コンペティションする。

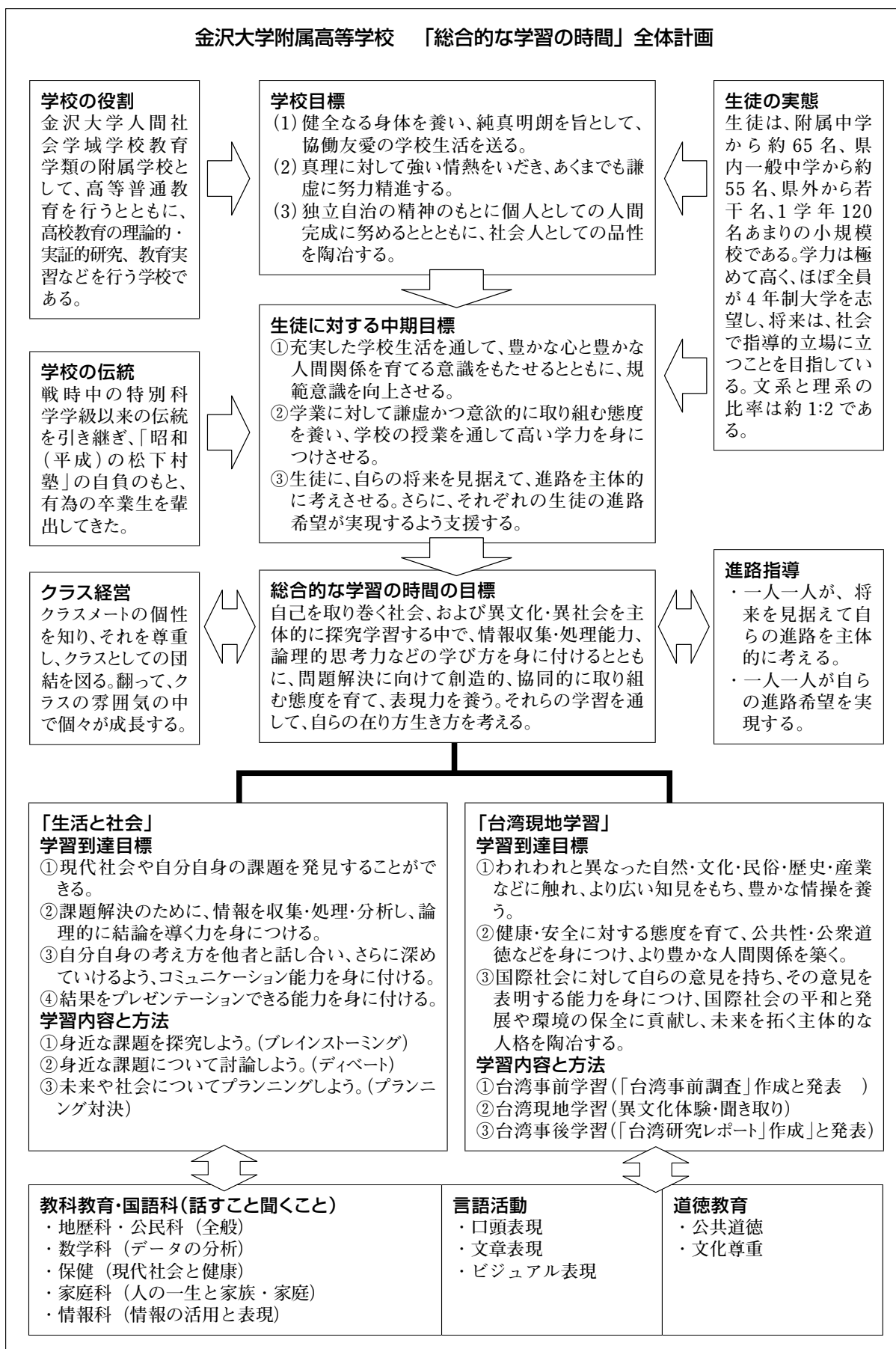
「台湾現地学習」1～2年生1単位

- ・台湾をフィールドとし、グループテーマを決め、その中で個々人が個別テーマを定めて事前研究、現地調査・検証をし、その結果をレポートにまとめ発表する。

4. その他の特色

- ・すべてのプログラムはグループで活動するものとなっており、協同性を重視している。
- ・「生活と社会」で探究、創造、表現する学習活動を行う。続いて「台湾現地学習」で探究、体験、表現する学習活動を行う。以上の活動を通してスパイラル的に、自らの生き方在り方を考える所に、本校の「総合的な学習の時間」の全体的な特色がある。

金沢大学附属高等学校 「総合的な学習の時間」 全体計画



II 総合的な学習の時間の実践事例

第1学年 単元名「プランニング対決」

1. 年間指導計画

1年生の「総合的な学習の時間」は、「生活と社会」の名称で展開する。1学期2時間、2学期3時間連続で時間割の中に位置付け約70時間を確保し、2単位として実施している。

入学時から1学期前半は、単元「身近な課題を探究しよう」を実施する。「身近な課題」を教員が生徒に与え、生徒はKJ法的手法でブレインストーミングし、その成果をポスターを用いて発表する。近年の課題は、「東日本大震災に我々は何ができるか」、「都会と田舎、どちらが住みやすいか」などである。

1学期後半は、単元「身近な課題を討論しよう」を実施する。「身近な課題」を生徒が選択し、それについて4対4でディベートを行う。テーマは「志賀原発は再稼働すべきか」のような時事的な話題から、「朝食は、ごはんとパン、どちらがよいか」など自己体験を生かしたものである。

単元「プランニング対決」は、2学期をかけて実施する。「未来を創造する同一テーマ」に対して2チームがプランを立て、それをコンペティション（競い合い）するというものである。「プランニング対決」は、「生活と社会」の仕上げに位置付けられるもので、ディベートで学習した技能や考え方をさらに磨き深め、創造性も要求する。

2. 単元計画

(1) 単元設定の理由

生徒は将来、職場においても地域その他のさまざまな組織においても、必ず課題解決が求められる。その場合、課題に対してチームでプランを立て、それを競い合い、社会の承認を受けて実行する能力が必要となる。「プランニング対決」では、それに資する情報収集能力、情報

処理・分析能力、論理的思考力・構成力、表現力、協働性、現状を改革する創造性を養う。

(2) 単元の目標

「未来を創造するテーマ」として、身近な視点から適切なテーマを設定し、そのテーマについて情報を収集・分析して、プランを作成する。そしてそのプランを論理的にまとめ、プレゼンテーションソフトを用いてわかりやすく表現する。プランに対する他者からの質問や批判に的確に対応できる。

(3) 単元の評価規準

- ①調査力：プランの内容の深さ・広さ
- ②論理性・説得力：プレゼンテーションの論理的構成、創造性
- ③表現力：プレゼンテーションソフトの表現力、説明の声の大きさ、スピード
- ④協働性：グループメンバーでの協力
- ⑤対応力：質問・批判に対する的確な対応

評価は生徒による相互評価、自己評価と教員による評価を行う。

- ・生徒による相互評価は、発表者以外が、上記の5観点に基づいて各5点満点で点数化し、120字程度で所感（良かった点、改善すべき点）を記述する。
- ・自己評価は、発表後、120字程度で所感（できたこと、できなかったこと）を記述する。
- ・教員における評価は、発表終了直後に、5観点を踏まえて口頭で評価し、次回授業時までに文章評価する。

(4) 単元の指導計画

	月日	学習過程	活動内容	評価の観点
第1回	9/7	オリエンテーション	教員による内容・方法説明 先輩作品を視聴する	プランニング対決の内容・方法 の理解 プラン作成への意欲
第2回	9/14	テーマ決定に向けて		
第3回	9/21	テーマ・方法決定	グループ毎にテーマ案を列举、検討し、決定する。コンセプトの協議。 調査方法を検討する	「未来を創造する」のに適した テーマを選べたか
第4回	9/28	校内における調査 プレゼン作成	文献・インターネットでの調査 アンケート作成・集計 プレゼンテーション画像の作成	適切な情報収集・分析ができた か分担して作業できたか
第5回	10/5			
第6回	11/2	コンペティション1	同一テーマに対して2グループが プランを発表する。両チームが質 問・批判、回答する。発表者以外は、 プランを評価シートに基づき評価 する	調査力 論理性 表現力 協働性 対応力
第7回	11/6	コンペティション2		
第8回	11/16	コンペティション3		
第9回	11/21	コンペティション4		
第10回	11/30	コンペティション5		
第11回	12/19	学年最優秀プラン決定 コンペティション	生徒が選出したクラス最優秀グ ループと教員が推薦したグルー プを、1年生全員の前で発表。評 価は教員による	調査力 論理性 表現力 協働性

3. 学習活動の実際

(1) オリエンテーション—内容・方法・目標

「プランニング対決」とは、「未来を創造する同一テーマ」について、2グループが各々プランを作成しそれをコンペティション（競い合い）するプログラムである。テーマは、i) 提案型プラン、ii) 自己の生活を豊かにするプラン、iii) 創作型プラン、の大枠の中から選ぶ。i) の事例は「金沢市の理想的な交通体系」、「能登をプロデュース」など、ii) の事例は「理想の海外生活プラン」、「理想の家を建てる」など、iii) 創作型の事例は、「現代版源氏物語」、「おとぎ話の続きを作ろう」などである。

「プランニング対決」は次のような方法で行う。

- ①グループ編成、テーマ決定
- ②共通ルール、コンセプトの決定
- ③調査・分析・考察
- ④プレゼンテーション作成
- ⑤コンペティション

「プランニング対決」の目標は、情報収集・分析力をつけること、論理的思考力・構成力をつけること、プレゼンテーションソフトを使つての表現技能を身に付けること、協働してプランニングすること、現状を改革できる

創造性を身に付けることである。第1回目のオリエンテーションでは、これらの内容・方法・目標を生徒に明示する。これらを生徒がしっかり理解しているかがプランの成否を左右するからである。

さらに第2回目の授業では、先輩の優秀なプランを紹介する。「プランニング対決」の内容・方法・目標を徹底し、到達すべき水準を示すためである。

(2) テーマの決定

テーマ設定に関しては、まず、クラスを10グループに分ける。1グループは4人を原則とする。1学期におけるブレインストーミングやディベートでは、教員側がグループ編成するが、プランニング対決では、生徒の自主性を生かすために生徒自身によってグループ編成する。4人としたのは、メンバー全員が積極的に参加するのに適した人数であるからである。テーマ設定は次の手順で行った。

- ①各グループでテーマ案を列举、板書する
- ②プランニング対決に適するか選別する
- ③プランニングテーマを投票で5つに絞る
- ④各グループが5つのテーマに対して応募し、重複した場合はグループ間で調整する

(3) 調査・分析・考察

プラン作成に際しては、まず、両チームが共通ルールを定める。基盤が異なれば競い合いにならないからである。次にプランのコンセプトを決める。コンセプトは、調査を経たプラン作成中に修正してもよい。

調査方法は、文献・インターネットでの調査のほか、聞き取り、アンケート調査をする。アンケート調査は、データを処理し分析する技能を身に付けさせるのに有効である。共通ルール作成、コンセプトの策定、調査計画作成は3回目の授業で行い、授業終了時にこれらをワークシート「調査計画書」にまとめ提出する。

4回目・5回目は校内での調査に充てる。生徒たちは、グループごとに、文献・インターネットによる調査、アンケート作成・集計・分析などを行う。また、プレゼンテーションソフトを用いてスライドを作成する。この調査時間における生徒のモチベーションを下げないために、グループごとに毎回、ワークシート「調査実施書」を提出する。この間の教員の声かけが重要である。生徒の作業をできるだけ肯定的に評価し、現作業の発展性について示唆する。これらが生徒の作業に対するモチベーションをあげ、さらにプランの幅を広げる。生徒の作業を限定するような指導は不適と考える。生徒の発想を引き出すような指導が適切である。

調査時間はこの2回ではとうてい足りない。発表が近付くと、コンピュータ室を生徒に開放し、生徒の自主的作業を支援する。校外における調査も必要である。本年度の事例では、プラン「教科書に載るために」の調査のために、石川県教育センターを訪問し、文部科学省担当官に電話取材をした者もいた。外部との連絡も教員の仕事である。

(4) 発表準備

コンペティションにおけるプレゼンテーションは、プレゼンテーションソフトによるス

ライドを用いる。このスライド作成の技法は、教科「情報」と連動して習得する。そのほか、作品の製作、実演なども認める。プラン「金沢で金沢の新しいご当地お菓子を作る」では実際にお菓子を作り、プラン「ドロドロのドラマを作る」や「最も売れる J-POP を作る」では調査結果に基づいた作品を製作した。

事前のリハーサルも重要である。発表の速さやスライドの展開を確認しておくためである。

(5) コンペティション

コンペティションは次の要領で行う。

- ① Aチームのプレゼン (20分)
- ② Bチームのプレゼン (20分)
- ③ AチームからBチームへの質問・批判
- ④ BチームからAチームへの質問・批判
- ⑤ 作戦タイム
- ⑥ BチームからAチームへの回答
- ⑦ AチームからBチームへの回答
- ⑧ 生徒による審査
- ⑨ 教員による評価

平成24年度1Aのプランニングテーマ

- ・歴史上の人物で内閣を作る
- ・理想のゲームを作る
- ・「背中が語る」男性
- ・売れる週刊誌を発行する
- ・教科書に載るために



事例) 「教科書に載るために」 Bチーム



プレゼンの流れは上記に示したものであった。小学校教科書に載る人物を考案するという共通ルールのものに、「教科書について」と「教科書掲載人物の過去の傾向」を調査した。後者については、平成17年度採用及び平成23年度採用の全小学校社会科6年生教科書から掲載人物を抜き出して考察した。さらに、古い事例を調べるために1社ではあるが、昭和58年度、平成12年度、平成14年度採用の教科書も調査した。そこから「教科書に載る人物」は社会問題を解決した人物、とりわけ女性が増加しているという傾向を結論として得た。これらを踏まえて「人権問題で活躍した女性」の生い立ち・業績を造形し、物語の形にまとめて提示した。

(6) 審査と講評

生徒による審査は、単元の評価規準に基づいて、5観点によって行われた。①調査力、②論理性・説得力、③表現力、④協働性、⑤対応力である。各5点ずつ1人25点満点で採点、それを合計してコンペティションの勝者を決める。また、審査者はプレゼンに対する120字程度の所感を書き、発表者は発表した感想を書いた。体験を内在化するためである。

教員による評価が重要である。教員は、先の5項目の観点に基づいて口頭で評価する。生徒たちは、この評価を参考にして次回のプレゼンの改善に努める。

「プランニング対決」の最後のプログラムは、学年最優秀プラン決定コンペティションである。各クラス代表1チームと教員推薦チームが学年全体の前で発表し、副校長を委員長とする教員審査団が審査して、最優秀プランを選出する。

(7) まとめ

「最初は、結論をどうすればいいだろうという不安があったが、班員のみんなが意見を出して真剣に取り組んだことで本当に楽しく得るものが多いプランニングとなった。」

「社会ではこのような力が求められている。」

「人により伝えることを意識した」

平成24年度の授業を受けた生徒の感想の一部である。ほとんどの生徒が積極的に取り組み、学ぶ楽しさと達成感を感じていた。健全な競争心が協働性を発揮させたことが要因の1つであると考えられる。生徒の興味・関心に基づくテーマ設定で自主性を発揮できたこと、肯定的な声かけが意欲を増大させたことも、要因としてあげることができる。

「総合的な学習の時間」は、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることがねらいとされている。とりわけ「探究的な学習」と「協同的」に取り組むことが求められている。本校の「生活と社会」はそのねらいを達成すべく策定した。さらに高校段階で求められる「生き方在り方」の追究に資するものなるよ



うにと考えた。特に「生き方在り方」に関しては1年生末から2年生での「台湾現地学習」でさらに深めている。

生徒が作成した「売れる週刊誌」の表紙

組織的・系統的に推進する「総合的な学習の時間（Mikuma PAS System）」

大分県立日田三隈高等学校

大分県日田市大字友田1546-1

電話番号：0973-23-3130

E-mail：a32730@oen.ne.jp HP アドレス：http://kou.oita-ed.jp/hitamikuma/

学校や地域に関する情報

(1) 学校規模

生徒数 467 名、教職員数 59 名、

学級数 12 学級

(2) 学校の教育活動の特色

本校は平成8年に従来の商業科・家政科・普通科を統合し、大分県下初の総合学科に改編した。本校では、生徒が3年間の学習を通じて確実に「生きる力」を身に付けるとともに、「自己の進路目標を達成する」というねらいのもと平成14年に『Mikuma PAS System』を構築し、キャリア教育を組織的・系統的に実践している。

(3) 地域の特徴

本校のある日田市は、県の北西部に位置し、福岡県と熊本県に接する盆地である。主な産業は林業と観光であり、江戸時代は天領として栄え、広瀬淡窓の私塾「咸宜園」など、市内各所に往時を偲ばせる史跡を有する。

な生徒のキャリア発達に関する課題や教育的課題に対して、「確かな学力（進学力・就職力）の定着を図る」とともに、「将来の進路や自己の在り方生き方を主体的に考える力を育てる」ことを目標としている。

2. 育てようとする資質、能力、態度

本校では、生徒に身に付けさせたい力として、「4つの力+1（調べる力、まとめる力、発表する力、聞く力+計画する力）」を定めている。

例として1年次に実施する単元「この人に学ぶ（職業人インタビュー）」では、「計画する力」、「調べる力」を育成するために、この職業には、どういった資格が必要なのか、どのようなキャリアパスを踏まえてどのような勉強をすれば就くことができるのかななどを、職業人に、電話や手紙、直接訪問することによって調査し、報告書をまとめていく。そして、発表・評価・批評のサイクルを繰り返すことで「発表する力」、「聞く力」を定着させ、「生きる力」に結びつけることで、この「4つの力+1」を徹底的に指導している。

3. 内容

本校での学習内容は、生徒の発達の段階や進路意識、学習意欲などとの関連を考慮しながら設定しており、次のように系統的な学習に取り組んでいる。

○ 1年次は、総合学科の原則履修科目であり、学習のガイダンス的な役割を果たす「産業社会と人間」（2単位）において「自分を知る、社会を知る、自分と社会の接点を知る」ことを目標として、進路学習や「この人に学

I 総合的な学習の時間の全体計画

1. 目標

本校の生徒の進路希望は進学から就職まで多岐にわたるため、進路意識や学習意欲の向上、勤労観・職業観、コミュニケーション能力を育成するための学習プログラム、生涯学習の観点からその基礎となる取組が必要とされる。他方、入学時には高等学校における学習活動に対する意欲が必ずしも十分でない生徒や、進路希望が明確でない生徒もいる。そこで、このよう

ぶ（職業人インタビュー）」、科目選択、ライフプランの作成などの活動を通じて「4つの力+1」の基礎を学ぶ。

- 2年次は、「総合的な学習の時間（PAS Second）」（1単位）において、「自分や社会の課題を知る、様々な角度から自分や社会を見つめる」、「課題の解決方法を知る」を目標に「夏の活動（インターンシップ）」と、3年次の「総合的な学習の時間に向けた「プレPAS Third（研究テーマの設定）」の2つの単元を中心に学習する。
- 3年次の「総合的な学習の時間（PAS Third）」（2単位）では、自ら研究テーマを設定し、調査・研究・作品制作などを通じて課題の解決を図る。課題設定の視点は、「総合学科で学んだ集大成」、「将来の夢に向けて」など様々だが、資料収集で新たな世界を発見したり、取材を通して地域の人々と触れあったりと、通常の授業にはない体験ができる。自己の進路達成はもちろんのことライフワークの発見にも繋がるよう位置づけ、生徒一人一人がそれぞれのテーマに向かって研究活動を行う。

II 総合的な学習の時間の実践事例

2年「夏の活動（インターンシップ）」

1. 年間指導計画

2年次の総合的な学習の時間「PAS Second（通称：PS）」は、『Mikuma PAS System』のSecond Stageとして、年間35時間（1単位）、担当者4名で実施している。

PSの中心である「夏の活動（インターンシップ）」は、事業所の選定から事前訪問に至るまで、生徒が主体的に活動する「セルフプロデュース形式」を採用しているため、夏季休業中の体験活動、事後の活動を含めると、その期間は約半年間という長期間に渡る。

4. その他の特色

- 全ての活動において、常に「調査・記録・まとめ・発表・感想用紙の提出」を課しており、そこで身に付けたマナーや言葉遣い、記録方法といった学習態度は、普段の生活やその他の学習にも活かしている。
- インターンシップの事前指導においては、ジョブカフェ日田と連携し、「電話対応の仕方やビジネスマナーの指導」を行っている。
- 3年次の総合的な学習の時間では、10名程度の生徒に対して教員1名が指導する「少人数授業」を実施している。
- 3年次の「PT（PAS Third）面接講演会」では、大学教授や社会人講師を招き、「研究の方法や内容」についての専門的な指導を行っている。
- 3年次の研究活動において、アンケート調査や検証を行う際、教育機関をはじめ県内外の専門機関に協力を依頼する。

なお、「総合的な学習の時間の全体計画」及び『Mikuma PAS System』については、実践事例の後に示す。

また、PSの後半では、3年次の「総合的な学習の時間」に向けた「プレPAS Third（研究テーマの設定）」と1年次に作成した「ライフプラン」の見直しを行う。「プレPAS Third」では、まず「研究とは何か」・「研究とはどのような手順で行うのか」を指導した後、テーマを検討させ、予備調査的なものに取り組む。この活動の中で最も重要なのは、どのような「研究テーマ」を設定するかであり、生徒一人一人の「興味」や「関心」そして「進路」に絡めたテーマを設定するよう指導する。

また、関連する文献の探し方やインターネット
利用時の注意点、引用や出典に係る指導なども

行い、本格的な卒業論文の作成に取り組みせて
いる。

表 2年生総合的な学習の時間「PAS Second」活動概要

単元	「夏の活動」 ～事前活動～	「夏の活動」 インターンシップ	「夏の活動」 ～事後活動～	『プレ PAS Third』 「ライフプランⅡ」
目標	・自分や社会の課題を知る ・様々な角度から、自分や社会を見つめる			・課題を発見し、その解決方法を知る
時期	4～7月	7～8月	8～10月	11～3月
時間	計13時間	3～7日(個人ごと)	計7時間	計15時間
学習や活動の 主な内容	①概要説明 ②自己理解 ③外部講師講演会(電話 応対・マナー、心構 え) ④体験先の選定 ⑤依頼、アポ取り ⑥活動目標の設定 ⑦決意表明・履歴書 ⑧事前訪問	①目標に応じた活動の実 施 ②日誌作成 ③自己評価 ④事業所からの個人評価 ※進学希望者は自主的 にオープンキャンパ ス等に参加	①礼状作成 ②報告書の作成 ③発表準備 ④グループ別発表会(8 グループ) ⑤学年発表会(各グルー プ代表)	①概要説明 ②「3年生に学ぶ」 ③個人面談 ④「研究テーマ」決定 ⑤ライフプランの見直し
	各活動についてワークシートSTEP1～9を作成する			
	※活動ごと、発表会ごとに「まとめ・感想用紙」や「相互評価表」を提出する			
評価	①マナーが身に付いたか ②進路希望や興味・関心 に応じた事業所を決 定できたか ③適切な「目標」を設定 することができたか ④提出物 など	①「目標」に応じた活動 ができたか ②自主的で責任感ある活 動ができたか ③マナーや言葉遣いが身 に付いたか ④適切な自己評価ができ たか ⑤日誌がもれなく書いて いるか など	①「目標」の達成度の確 認と「自己の課題」 を発見することがで きたか ②活動の様子が伺える報 告書が作成できたか ③他者の発表から情報を 共有することができ たか(相互評価) など	①「課題」を発見するこ とができたか ②自分の将来(進路・興 味・関心など)を展 望した「研究テーマ」 を設定することがで きたか ②ライフプランを修正 し、より具体的な将 来を描くことができ たか など
	「4つの力+1」を活かした取り組みができたかどうか(観点別評価)			

2. 単元計画

(1) 単元設定の理由

総合学科開設12年を機に、本校の総合学科
を総合的に検証したところ、生徒には「進路希
望の多様化」や「積極性・主体性の未成熟」と
いった課題が明らかになった。これに対応す
るためには、できるだけ早期に勤労観・職業観を
育成し、生徒の進路意識を高めることが不可欠
である。そこで、従前の体験活動をより一層充
実させるために、「セルフプロデュース・オー
ル・インターンシップ」へと深化させ、2年生
全員に義務付けることにした。

(2) 単元の目標

「夏の活動(インターンシップ)」の目標は

次の5点であり、生徒は個々に目標を設定して
いる。

- ①働くことの意義や大変さを理解するとともに、「達成感や責任感」さらには「やりがい」といったものに気づき、将来、社会生活や職業生活を営む上で必要なことなどを考察し、進路意識の向上を図る。
- ②同一の職場における、連続した就業を通して、職業に対する知識を深め、自己の職業適性や耐性等に係る自己理解を深めする。
- ③活動の過程で行われる事業所の選定やアポイントメント、事前訪問や履歴書の作成などの諸活動を通して、計画力と行動力を養う。
- ④活動を通して、その職業に必要な知識・技術・

技能を認識するとともに、「働くこと」と「学ぶこと」のつながりに気づき、学習意欲の向上を図る。

- ⑤「4つの力+1」を活かし、より発展的かつ実践的な活動とする。

(3) 単元の評価規準

「夏の活動（インターンシップ）」では、「生徒の自己評価」と「事業所からの評価」、「教員による活動の評価」の3つの評価を行っている。評価規準としては、「目標に応じた活動ができたか」や「自己の課題を発見できたか」などの内面の変容と「作成物・提出物」などの点について評価する。事業所からは、「マナーや態度は適切か」や「自主性や責任感が感じられたか」といった点を中心に個人を評価して貰う。また、全ての活動を通して「4つの力+1」の観点からも評価を行い、上記の評価と合わせて総合的に判断し生徒に還元している。

3. 学習活動の実際

「夏の活動（インターンシップ）」は、4月のオリエンテーション（STEP1）終了後、活動が始まる。具体的には、事業所の選定から事前打ち合わせまでを「STEP1～9」と位置付け、系統的に学習する。

例年、本校のインターンシップは、日田市内を中心に、小売・製造・サービス・医療福祉・公務など70以上の事業所で実施している。

(1) 自己理解の深化

生徒は、1年次の「この人に学ぶ（職業人インタビュー）」やライフプランの作成などを通して、社会を知り自分の進路や将来を描くための学習を行っている。これを踏まえて2年次のインターンシップでは、仕事に対する理解や自己の適性等の理解を深めることを目標としている。そこで、STEP2では、働くことを介した「自己理解の深化」に取り組んでいる。

(2) 電話対応・マナー講座

「セルフプロデュース型」のインターンシッ

プは、生徒が自ら事業所に「依頼」することから始まる。この依頼の際、生徒が、活動の目的や実施時期等について漏れがなく、また先方の方に失礼がなく連絡できるよう、ジョブカフェ日田の方に来校して頂き「電話対応・マナー講座」（STEP3）を実施している。また、本校配置の就職支援員による講演会、「インターンシップの心構え」（STEP4）を実施している。

(3) 体験先の決定

生徒は、過去の受入事業所一覧表を参考に体験先を選定する。しかし、中には生徒の強い希望により、新規に依頼する場合もある。また、同一の事業所での体験を希望する生徒が複数名いる場合は、その中から「代表者を1名選出し、その生徒を中心に電話依頼や事前訪問の日程調整（STEP5・6）を行う。これは、「セルフプロデュース型」に移行した際、同一の事業所に対して複数の生徒が別々に依頼電話をかけ、事業所側が日程や担当者の調整といった対応に困惑したことへの改善からである。

(4) 履歴書の作成、事前訪問

体験希望先から受け入れの承諾を得た生徒は、「体験したい仕事内容」や「活動を通して学びたいこと」、「インターンシップの目標」をシート（STEP7）にまとめ、「卒業後の進路希望や学校内外の活動、資格取得の状況」等を「履歴書」（STEP8）に記入し、依頼文書

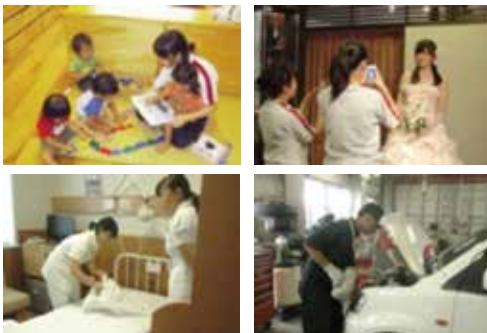
2年「総合的な学習の時間」PAS Second
「夏の活動」インターンシップ事前活動【STEP7】
2年()組()番 氏名()
決意表明～インターンシップに向けて目標を立ててみよう!～
これから「夏の活動」インターンシップを実施するにあたり、希望する事務所や体験したい仕事の内容などの決意表明を書きなさい。
<インターンシップを希望する事業所名・職種>
<上記の事業所を希望した理由>
<体験したい仕事内容や見たこと>
<インターンシップを通して学びたいこと>
…上記の内容をふまえて ↓
<インターンシップの目標(決意)>

図 STEP7・「活動目標の設定」

(誓約書を含む)を持って事業所を訪問する。その際、実施日や体験内容の設定のほか、当日の服装や体験に必要な物などの確認(STEP9)を行う。

(5) 体験、日誌・礼状の作成

インターンシップの活動日数については、仕事の内容や職場の状況に合わせて、おおむね3～7日間で行うことを基本としており、その間生徒は、与えられた業務に従事するほか、「職業人インタビュー」の要領で、従業員の方々に学ぶ。



また、帰宅後には、1日を振り返り、失敗談や小さな成功体験、心に残った出来事や一言等を詳細に日誌に記入する。

【実施日】	月	日	曜日
【出社時間】	【退社時間】		
【行動記録】 ※ ※ ←→を引いて記入すること。			
7:00	8:00	9:00	10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00
【具体的体験内容】			
<午前>			
<午後>			
【本日の感想と反省】			
【自己評価】 当てはまる内容に○を付けること			
① 出社時間 (大変良かった・良かった・やや悪かった・悪かった)			
② 挨拶・言葉遣い (大変良かった・良かった・やや悪かった・悪かった)			
③ 作業態度 (大変良かった・良かった・やや悪かった・悪かった)			
【心に残った出来事や一言・明日への抱負】			
※ここまで記入ができたなら、事業所の方にお見せしよう。			
【事業所の方より】			

図 インターンシップ活動日誌

そして、体験終了後には、生徒一人一人が、事業所の担当者から「個人評価表」を頂くとともに、生徒は「礼状」を作成し、各事業所へお送りする。

(6) 報告書の作成、発表会

体験終了後は、報告書を作成し「目標やねらいにどれだけ迫ることができたのか」の確認を行うとともに、グループ発表、学年発表会の準備に取りかかる。

備に取りかかる。

図 「夏の活動」報告書

グループ発表は、全員が資料を提示して発表し、全員の発表を聞くことで「情報の共有化」を図っている。同じ職場で同じ体験をしているにもかかわらず、生徒間で「感じ方」や「仕事に対する受け取り方」が異なっていたりする点は、個性とともに



勤労観・職業観の相違が見られ大変興味深い。

また、グループの代表による学年発表会では、プレゼンテーションソフトを活用した説得力のある発表が見られ、「4つの力+1」が進化している様子がうかがえる。

病院の調理を経験した生徒は、事前に大腸菌の検査を受け体験に臨んだ。「患者さまにとって、栄養のバランスがとれた美味しい食事を提供することだけが、調理師の仕事ではない。法律に則る徹底した衛生管理などプロフェッショ

ナルの姿勢とその現場を体験することができた」という感想が聞かれた。また、小売店で体験した生徒は、お客様が社員の方に嬉しそうに話し掛けている様子から「仕事のやりがい」を感じたこと、「私はまだ、ありがとうと言われる仕事はできませんが、頑張れと言っていたとき、本当に嬉しかった」と発表した。

(7) 成果と今後の課題

活動の成果および評価は、以下のとおりである。

- ①数日間の体験を通して、仕事に対する理解や自己の適性等の理解を深めることができた。
- ②地域の方との関わりや地域で働くことの意味など、地域に目を向ける契機となった。
- ③授業で学ぶ教科・科目と実社会で必要な知識や能力との接点を知り、学習意欲を高めることができた。
- ④マナーや言葉遣い、態度など、自分の課題の発見につながった。
- ⑤「4つの力+1」の定着具合を知り、次の目標設定につながった。

表 インターンシップ事業所評価のまとめ

	平成 24 年度・38 事業所の評価（前年度）
質問 1	インターンシップについてどう思われますか？ A. 評価する 100%(97.9%) B. 評価しない 0% (0%) C. どちらとも言えない 0%(2.1%)
質問 2	体験期間はどれくらいが適当だと思われますか？ A. 5 日以上 2.6%(12.5%) B. 2～4 日 94.8% (81.3%) C. 1 日 2.6%(6.2%)
質問 3	来年度もインターンシップにご協力頂けますか？ A. 協力する 92.1%(94%) B. 協力できない 0% (0%) C. どちらとも言えない 7.9%(6%)
意見・要望等	○何を学びたいか、疑問点などを積極的に質問して欲しい。 ○業種についての事前調査をもっと行うとより効果的である。 ○笑顔で明るく挨拶することに慣れていないようだった。 ○指示を待つのではなく、自主的に積極的に行う意欲を持って欲しい。 など

本校のインターンシップに対する事業所の評価は、非常に高いものであるが、事業所との「連携」を深め、「体験の質を高める」ことでより教育的効果が上がるものと考えられる。

また、今後の課題として、インターンシップとその他の教科・科目との関連性をより高めることができる方策を検討することや、当該活動で生徒が身に付けた力（マナーや言葉遣いも含む）を学校生活の中で活かす指導の充実、そして生徒が認識した「課題」を生徒自身の力で克服することができるサポート体制の確立などの必要性が考えられる。

これまで述べてきたように、本校では、『Mikuma PAS System』の下、「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」を柱にキャリア教育を組織的・系統的に実践している。その中でも、「夏の活動（インターンシップ）」が、進路を決定する際に大変効果的だった答える生徒の割合は、平成 23 年度卒業生調査において 65%に達するなど、年々高まっている。無論、インターンシップを通して、自己の適性に課題を感じる生徒や、進路希望の再考を行うこともある。また、3 年間の学習活動として捉えると、1 年次「この人に学ぶ」、2 年次「夏の活動」、3 年次「研究活動」そして「進路実現」と進む中で、例えば、1 年次「看護師」にインタビューし、2 年次「病院」でインターンシップを体験し、3 年次「医療問題」について研究をし、「看護学校」に進学する、というプロセスを経て「夢を実現する」という生徒が増えていると感じる。

本校で培った力が、後の人生の節目、節目で作用することとなり、「総合学科で学んで良かった」という卒業生を一人でも多く輩出していきたい。